

16. 冠動脈造影にて非有意狭窄で²⁰¹Tl心筋シンチグラフィで虚血を示す症例の検討

梶山 正治 中西 敏夫 (広島大・放部)
 山形 東吾 黒川 純一 (同・一内)
 伊藤 勝陽 (同・放)

冠動脈造影と運動負荷²⁰¹Tl心筋シンチをほぼ同時に施行した88例において、梗塞責任冠動脈、PTCA施行枝を除いた実測50~75%の有意狭窄枝37例と実測25~50%の非有意狭窄枝32例にわけ、運動負荷心筋シンチ所見はSPECTおよびBull's eye mapを用い、冠動脈に沿った虚血を認めたものを虚血ありと診断し虚血の有無とで検討を行った。25~50%の非有意狭窄病変例で約30%で虚血ありと診断された。非有意狭窄病変で虚血を認める特徴としては他枝に狭窄病変がなく、前下行枝または回旋枝近位部に病変がある場合に多く認められた。

17. くも膜下出血後、発症した脳炎の1例

小野志磨人 森田 浩一 永井 清久
 三村 浩朗 柳元 真一 友光 達志
 大塚 信昭 福永 仁夫 (川崎医大・核)

症例66歳、男性。主訴：頭痛、平成4年3月10日当院救急部受診。くも膜下出血と診断。3月13日、動脈瘤の手術を施行される。経過は良好で、神経学的異常も認めず、4月7日術後の脳血管造影が行われた。4月8日朝から失語が出現した。同日のMRIでは左頭頂葉を中心にT₂強調像上高信号とGd-DTPAによる軽度の増強効果を認めた。4月9日に行われた¹²³I-IMP SPECTでは左大脳半球に広範な高血流を認めた。SPECT所見からヘルペス脳炎が疑われ、抗ウイルス剤の投与を開始した。投与後3日目から意識レベルは急速に改善した。本例はその後良好な経過をたどり、独歩で退院した。脳炎に対してSPECTは有用と思われた。

18. くも膜下出血後の症候性脳血管攣縮に対する^{99m}Tc-HM-PAOによる脳血流シンチグラフィの臨床的役割

藤原 尚美 合田真由美 余田みどり
 川崎 幸子 大川 元臣 田邊 正忠
 (香川医大・放)
 松野 慎介 (住友別子病院・放)
 入江 恵子 長尾 省吾 (香川医大・脳外)

脳動脈瘤患者11例(H & H grade II: 2例, III: 6例, IV: 3例)を対象として、^{99m}Tc-HM-PAO SPECTから局所大脳カウント/小脳カウント比(C/C比)を求め、その臨床的有用性を頭蓋内Dopplerおよび臨床症状と比較検討した。SPECTは、発症から14日までの間に3~4回施行した。中等度以上の血管攣縮を生じたのは11例中5例でありC/C比は低下していた。C/C比の低下は、臨床症状を反映しており、血管攣縮の早期診断に有用で、C/C比が0.8以下を示す場合には、血管攣縮の可能性が高く、脳血管造影を施行し、血行再建術を考慮する必要があると考えられた。

19. Diamox 負荷 SPECT の有用性について

—負荷¹³³Xe局所脳血流測定との比較—

菅原 敬文 棚田 修二 井上 武
 村瀬 研也 田中 伸二 三木 均
 飯尾 篤 濱本 研 (愛媛大・放)
 大田 信介 榊 三郎 (同・脳外)

^{99m}Tc-HMPAOによるDiamox負荷SPECTで観察される脳循環予備能を、同時に測定したDiamox負荷¹³³Xe局所脳血流測定と比較検討した。負荷時の病巣部、健常部の血流比(L/N比)で比較すると、XeのL/N比が0.6以下では6例中5例、0.8以下では13例中11例、1.0以下では13例中2例で、HMPAOのL/N比の方が高く、脳循環予備能の障害度を過小評価していた。脳循環予備能の障害度が強くなるほど、Xeに比較してHMPAOではその程度を過小評価する傾向がみられ、Diamox負荷SPECTによる評価には注意が必要と思われた。